問 3-7　肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
1	生きるか死ぬかの出産だったので、仕方がないのではないでしょうか。
2	自分は無症候キャリアなので、今のところ深刻には感じられない。不幸中の幸いだと思っている。しかし、重症な方もいるし、重大な問題だ。
3	陣痛促進剤と二重の薬害だと思った。
4	私は、急性前骨髄性白血病でした。出血を止めるための治療が必要だったので、その時は仕方なかったという思いと、別の病気になってしまったという複雑な思いがありました。
5	死の恐怖にさらされ 20 年。子供が成長した分、その年の年数だけ自分の命の不安が大きくなっていくことに、情けなさを感じて生きてきました。どうしてそんな血液製剤が使用されていたのか、また薬害事件なのかと。出産時に、自分の身体にウィルスが入っていたことがショックでした。
6	この薬により命を救われたという思いがあります。昭和 51 年の段階では、医療機関としてはやむを得なかったと思いますが・・・。国としての責任はあると思います。
7	硬膜下血腫血時の治療だったので、私にとってもその時は、痛いことも一切分からなかった。記憶や感覚は一切分からなかった。
8	その時は、自分は意識がなくなっていた時なので、もし血液製剤を使っていなければ、今の私はいませんでした。
9	命が助かった事に感謝しなければいけない。全ては運命と、長い間自分に言い聞かせて生活していた。フィブリノゲンが肝炎に汚染されていたとしても、止血剤として効果があったものと信じていた。アメリカで 1977 年に、有効性がないとして廃止されていたと知り驚いた。
10	国、都、病院関係者から、直に謝罪を受けたこともなく、一生を奪われた苦痛を、どこに向けていいのか分からない。金などいらないので、自分の人生を、経験するはずだったすべてを返してもらいたい。
11	複雑な思いのまま、すぐには結論が出せなかった。
12	国、製薬会社より死の宣告を受け、心身共に奈落の底へ突き落とされた。認可に携わった人達を恨み、殺してやりたい気持ちでいっぱいだった。
13	肝炎が血液製剤と知った平成 20 年 1 月も、現在の心臓内科に通院中でした。平成 6 年から現在の心臓内科で時々採血を受け、肝臓の数値が安定していると聞かされたものの、平成 8 年 4 月頃、医師が「HCV 陽性で軽度の肝機能障害あり」と言われたことをふと思い出し、頭の中が混乱しました。「採血上安定している」と言う医師の言葉と、何と言っても自覚症状がないにもかかわらず、体の中では少しずつ進行していると感じました。もしかしたら、大変な状況になるかも知れないと、時間の経過とともに強く感じました。
14	止血剤にウィルスが混入していた事実を知りながら、使い続けていた厚労省、製薬会社に怒りを持ち続けています。
15	私自身が弱くて、肝炎になってしまい、家族に申し訳ないと、20 年間ずっと思ってきました。又、義理の両親、義兄の家族にも、肩身の狭い思をしてきました。薬害と知った時、少しほっとしました。
16	後になって、これほど危険な血液製剤だと判明したが、私が手術を受けた当時は、それを使わなければ、死に至ったかも知れないので、それを考えると、とても複雑な思いです。
17	現場ではなく、国や厚労省に、製薬会社に対して怒りを感じました。
18	世界は中止していたにもかかわらず、日本は役人と製薬会社との癒着を強く感じた。
19	肝炎であることを知らずに、献血を年に一度していたことが辛い。
20	命を救うには、その方法しかなかった。医者は、当たり前の行為をしただけだと思った。他人事のように見ていたテレビの内容が、まさか自分にもあてはまっているかも知れないという驚き。何で騒いでいるのか、理解できていなかった。
21	フィブリノゲンが低下したため使用したので、仕方がないと思う。でも、C 型肝炎はいらなかった。
22	出産時に出血が止まらなくなってしまい、病院の先生方全員が集まって、あらゆる手段を尽くして下さいました。その時、あらゆる薬を使ったと言われ、それでも止血できずに手術されました。もし、血液製剤が肝炎の原因になると分かっていたとしても、その時お医者さんは、止血できるならその危険を冒してでも、まず止血しようとして、薬を使われただろうと思いました。ですから、お医者さんには全く恨みを感じていません。でも、そういう汚染された薬であることが分かっていながら、売り続けた製薬会社は、患者と医療関係者両方を裏切ったと思いました。
23	輸血によって感染したと思っていたので、命を助けてもらったのだから、仕方がないと思っていたが、カルテによって、血液製剤が原因だったことが分かり、またショックを受けた。
24	結婚生活破綻の原因のひとつになっていると思います。
25	インターフェロンにより、ウィルスが消えています。現在は気持ちが落ち着いています。
26	38 才からずっと、人に知られてはいけない病気を背負って生きてきました。その間いろいろな健康食品を飲み、病院には行かなくなりました。医者に、冷たい仕打ちを受けました。ステビアを飲み始めて、かなりよくなりました。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
27	感染した時は、まだ危険性や生死に関わる問題とは思ってもみなかった。
28	当時は、命と引き換え状態だったので、仕方がないと思っていた。
29	私の場合、3,800cc もの輸血を受けましたので、止血のために使用したものでした。カルテを見ると、1 回では止まらず、2、3、4 回と、何時間かにわたり使ってあったことから、やはり止血にはあまり効かなかったのだと思います。7 グラム使用してありました。
30	帝王切開だったので、その時には不信感はなかった。2 年前に知らされて、あの苦しみは理由があったのだと、初めて分かりました。医師は、精一杯やって下さったのですから、仕方がないと思います。製薬会社ですね。
31	原因が判明したことで、気持ちが晴れた気もしました。
32	22 年間ずっと出産時の輸血による感染だと思っていました。病気になったのは、天災のようなもので仕方がなかった。命があるだけでも感謝しなくてはいけないと、己に言い聞かせてきましたが、事実が分かった時は、あまりの展開にめまいがしました。
33	初回の連絡が来た時、病院に来てもよし、保健所でもよしと言われ、保健所にも行きましたが、国からの連絡は届いていませんでした。
34	現在は、治療中を除いては、日常は不自由なく生活できているが、やっと子供が手を離れて、パートに出られそうな時に判明したので、結局は働かず内職のみで、病気の事も隠しての生活だった。
35	危険な血液製剤という認識が、医療現場及び医者にあったのか、今でも疑問だが、当時医者からは、患者のためには使いやすいものだった、危険性の認識はなかったと説明を受けた。ならば、この血液製剤に危険があるかも・・・と認識していたのは、国、厚労省が一番情報があって知っていたと思う。危険性の重みを感じずに、阻止しなかった国の体質だろうと思う。被害が広がり残念。
36	私は、昭和 59 年まで 3 年程看護師をしていました。その当時、日常的にフィブリノゲン等の血液製剤を出血時に使用していました。私も何度か、あの小さなボトルを点滴台に下げたと記憶しています。そして、手術後、輸血後、肝炎ということで、具合の悪くなる患者にも接していました。1987 年に胎盤はく離で死産し、2 週間入院した時に医師から言われたのは、「最近、肝炎になる人が多い。必ず検査を受けてね」ということでした。新鮮血の使用については説明がありましたが、血液製剤については何も説明はありませんでした。その時の医師の困惑した様子がずっと気にかかり、何だか違和感を覚えてしまいました。新鮮血では、そんなに肝炎にはならないのではと、ずっと疑問に思っていました。2002 年にフィブリノゲンの件が明るみに出て、自分への使用を確信しました。2007 年、出産した病院に電話をして、フィブリノゲン使用が判明しました。その時、もやもやしていたものが晴れた気がしました。同時に、製薬会社の責任感のなさに腹が立ちました。
37	羊膜はく離での出血で、当時は、医師もそれが一番の止血方法だと思ったので実施したことで、あまり被害者意識はなかった。
38	その時の状況がどうであったか分かりませんが、使用しなければ出血性ショックで、今はいなかったかも知れません。使用しなくても変わらなかったかも知れませんが、そうは思いたくありません。その当時のお医者さんも、そんなに大変な薬との認識が、なかったと思います。
39	家族は私と同じ血液型でした。出血時に連絡が入れば、血液製剤を使う必要はなかったのではないかと、今でも思っています。車で 5 分程度の産院でした。医療に関わる医師を中心とした方々の、対応を疑う思いです。
40	血液製剤の説明は、当時、「青森で起こった事件は非加熱だったから。現在のは加熱されているから大丈夫。早く退院したいでしょ」と、先生から言われました。ただそれだけの説明です。
41	頭の中が真っ白になった。
42	大量出血のため、止血目的ではやむを得なったのか？本当に血液製剤が必要だったのか？悩み続けました。その後、フィブリノゲンがいかに安全確認されず、過去に多くの事例があったにもかかわらず、国、臨床、特にミドリ十字が、利益のためにもみ消していたと思うと、大変な怒りを覚える。「私の人生を返して」と毎日考え、今日に至っている。
43	産科の先生が血液製剤を使ったことを、一言も説明がなかった。母子手帳にも記さないし、一言説明がほしかった。私は 418 名の 1 人で、病院にもマスコミが行った。病院側では、患者に説明しているはずだと言い張った。言った、聞いていないのやりとり。私自身一番傷ついた。とても疲れた。
44	闘病生活、転職せざるを得なかった事、内定を取り消された事、キャリアを生かせる仕事に就けなかった事。今もインターフェロンの副作用による食生活に、苦労している事。人生が大きく変えられた原因が、国の医療行政、製薬会社のもうけ主義にあったと思うと悔しいし、二度と薬害の起きない社会にしなくてはと思った。
45	自分自身をけがされた深い屈辱感に陥った。
46	血液製剤が原因だと分かるまでは、自分が悪いのかと思っていた。出血が多いのを止めるのは、これしかないと言われてそう思っていたので、分かるまでは仕方がないと、正直思うしかなかった。
47	当時は止血目的に使用されていたので、仕方ないのかとも思いましたが、製薬会社の実態を知るにつけ、これはとんでもない血液製剤で、製薬会社がもっと早く回収していたら、防ぐことができたものだと思った。
48	国に毒を盛られたと思った。
49	病気を治すべき病院、医療によって、健康を奪われたことを強く感じた。何故、危険な薬を使ったのか、怒りが湧きました。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
50	肝炎で入院した時、医師からの説明はとても曖昧で、納得できませんでした。
51	入院時は意識がなく、手術方法は全く知らされず、分からなかった。
52	私が、血液製剤によってC型肝炎に感染した事を知ったのは、2002年の夏ごろでした。それまで15年の間、この病気に罹ったのは、死産でこの世に産み出してやれなかった子供からの罰を受けていると思っていました。それは大きな間違いであったことを知り、子供への申し訳なさや、いままで家族にかけてきた、取り返すことのできない負担を思い、憤りを感じました。
53	頭が真っ白、先が真っ黒。全てが終わったように思えた。原因が、フィブリノゲン製剤だと分かっていたので、何もできず、泣き寝入りせざるを得なかったのが、本当に悔しく辛かった。これからどうなるのか、非常に不安で苦しかった。
54	当時は、それで仕方がなかったのなかと、思っていました。でも、時が経つにつれ、いろいろな情報が入るにつれて、人的だったのでは、という思いも湧いてきました。元気だけが取り柄だったのに、体に変調もあり、不安でいっぱいです。
55	まだ、C 型肝炎という病気が知れ渡っておらず、当時、夫の両親と同居しており、姑は、病気がちな私を、疫病神のように扱った。家を出て、離婚も考えたが、夫も一緒についてきてくれたので、大事には至らなかった。
56	手術の時に大量の出血があり、この状況を抜け出すには、当時としては、フィブリノゲンを使用する他に、手段がなかったと思うので、仕方のないことだと思うが、C 型肝炎ウィルスに感染していると分かった時の絶望感は、言葉では言い表せられなかった。
57	当時は、この方法で治療するより仕方がなかったと思う。しかし、もう少し早い対策をしてほしかった。ただ、ただ、怒りを感じる。
58	病気が判明した当時は、出産時の状況から製剤を使用したことは、仕方のなかったことだと思って、感染したことは運が悪かった、むしろ、出産時にこのような自分だったことを自分で責めて、病気に対しても諦め感の方が強かった。
59	手術時に輸血もしているので、ずっと輸血による感染だと思っていた。止血剤が原因と知り、輸血に協力してくれた方々からの感染ではなかったことが分かったことが、嬉しかった。
60	私が肝炎になった事で味わった苦労や苦痛は数えきれないほどあり、なぜ私がと、何度涙を流したことか分かりません。これは、経験した本人でないと、分からない事だと思います。しかし、夫や親からも大変お世話になり、言葉では言い尽くせないほど、感謝しているのも事実です。
61	離婚し、1人で生活保護を受けて、年金での生活をしている。
62	出産時の大量出血により、血液製剤と輸血が投与されました（DIC のため）。C 型肝炎は恐い病気ですが、当時を振り返ると、医師や看護師の方々が一生懸命治療して下さり、命を助けていただき、大変感謝しております。
63	C 型肝炎が報道された頃、出産した病院に問い合わせしたところ、フィブリノゲンは使用していないと返答された。慢性肝炎は非 A 非 B の後遺症と思わされました。それから 5 年後に通知が来た時は、愕然としました。実父と同じ肝ガンで死ぬのか・・・と、恐ろしかったです。
64	自分の命を守るためには、当時は仕方のない方法だったと思うが、安全面を検証しないまま認可されて使われた事には、怒りを感じる。
65	出産時、血液製剤を使用していなかったら、私は死んでいたと思う。
66	出産時帝王切開手術で、当時は輸血 8 本しましたから、原因はそれだと思い、血液製剤が使われていたとは夢にも思わなかった。2 度の流産。やっと授かった子供と私が生死の境にあり、親子共々助かり、宝をいただいたが、一生共にする病気になり、憎むこともできず、娘を得た事は、自分の命より大切です。インターフェロンは 2 回やりましたが、効果はありませんでした。副作用がとても辛いです。又、3 回目に挑戦したいと思っています。複雑な気持ちで一杯です。
67	他人事と思っていた薬害の被害者に、自分がなってしまったことに、ショックを受けました。
68	輸血後の肝炎だと思っていて、それで命が助かったのだから仕方がないと、前向きに治療などして生きてきたが、血液製剤が原因だった時は、非常にショックを受けた。
69	25 才。出産時の出血により、止血剤としてフィブリノゲンを投与されたことで、私と家族の人生は、C 型肝炎との闘いになってしまいました。薬害相談のホットラインへの電話により、フィブリノゲンの投与によるものと分かった時の驚き。いい加減な使われ方により、C 型肝炎に感染させられた悔しさ、空しさ、憤りを感じ、涙があふれました。絶対に許せないと思いました。
70	当時は、命を助けてもらったと思い、医師にお金を渡す程感謝していた。後になり、大変な薬剤だったと知り、愕然としたが、何処へ怒りをぶつけたらいいのか。それよりも、将来への不安が大きかった。
71	この病気がもととなり、現在他の病気にかかり、そちらでも体力とお金がかかり、生活は大変であり、精神的にもまいっている。
72	院長先生は、命を助けてくれたのだから、それで十分幸せ。
73	危険な薬だと知らなかったので、止血のためには仕方なかった。血液製剤で助かったと思っていた。薬害だと知り、必要なかった薬だと知って、自分の健康、人生を奪われて、腹が立った。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
74	血液製剤を使用する医師としての勉強というか、医療をする立場と、その薬を使用する人達の横のつながりがなく、お金儲けのための犠牲になったと感じた。もっと、1人1人が責任をもってほしかったです。
75	止血について、医師から告げられた時、血液製剤について何も知らなかった。出産時に出血が多かったと医師が判断し、使用したのであれば、必要な治療だったのだろうと思っていた。「沈黙を越えて」の資料を読み、他の治療方法があったことを知った。安易に使用してはいけない薬だったことを認識した。私も家族も、健康と時間を奪われたと感じることはあるが、インターフェロンの治療で精神的に安定したため、どちらとも言えない。
76	感染を知った時には、肝炎に対する知識がなかった。●●病院の先生からの説明に納得できず、●●●大の●●●●先生より、「肝炎に対する勉強をして下さい。自分の身体の状態をきちんと知り、肝炎と向き合って下さい」と言われ、肝炎の本を2冊買い込み、大変な病気であることを知る。
77	私は、S55 年頃の医療関係者が保護されている時代に、医療過誤の隠蔽との二重被害と分かり、そのような悪事が放任され続けていることで、公が信じられない思いでいた。
78	出産時、子供に感染していないか、不安になった。
79	心臓の手術ができたおかげで、今生きておれます。手術をして下さった医師には感謝しておりますが、長い間感染原因が分からず、疑問に思っておりました。法律が施行されてから主治医より、手術の時にフイブリン糊を使用したとの便りがあり、やっぱりそうだったのかと納得しました。
80	病気もしたことがなかったのに、どうしてこんな病気になったんだろうと、情けなかった。
81	国の薬事行政に対する不信感、薬を使用した手術担当医の不勉強さを、強く感じました。
82	産後の止血に当たり前のように使われているのであれば、肝炎のリスクが伴うのも仕方のないことなのかと、簡単に考えていた。まさか、こんなにも恐ろしい病気になるとは。肝炎も一過性で消えると思っていた。
83	出産時、出血多量のため血液製剤を使用しなければ、今の私はなかったかも分かりません。それを思うと、助けてもらったという思いと、病気になったという思いで、複雑な心境です。
84	出血量が多く、輸血しないと命が危ないという時だったので、医師に対して感謝していただけに、仕方ないという気持ちもあった。長く肝炎治療をしていると、あの時使わなければ、こんな辛い経験をしなくてすんだのにと思った。
85	出血多量で●●病院へ行った時、当時の先生に、「体の中には半分しか血がない。1日遅れていたら死んでいたよ」と言われ、輸血。そして、フィブリノゲンを打たれた。C 型肝炎という病に罹り、治療が続いています。病と闘いながら生きて、家族と一緒にいます。
86	どうして、危険な血液製剤を国が許したのか？
87	当時、医師に、輸血をしなかったら命に関わっていた（死んでいた）と言われた。
88	手術の時に多量の出血のおそれがあると予測し、手術前後安易に使われた。
89	C 型肝炎という言葉を聞くのもイヤだった。自分の胸の中にしまい込み、考えないようにした。しかし、フィブリノゲンという言葉が母子手帳に書いてあり、愕然とした。訴えてやると思った。
90	血液製剤のせいで、次女を1年間育てることができず、長女も他人様に預け、子供達には辛い思いをさせてしまった。私も入院中は大変辛かった。若かったので、主人とも気持ちが通じ合わなくなってしまった。治療費、生活費、子供の預け費、経済的にも大変で、借金もした。
91	1人1人かけがえのない生命のはずなのに、生命や健康を守るべき立場の国や企業から、私の健康、人生、そして家族の幸せを奪われました。私には、生きる価値すらないような扱いをされたのかと思いました。
92	血液製剤を使わなければ、失血死していた可能性もあったのではないかと思うこともあります。
93	どちらとも言えないと、そう感じたのは紙一重です。
94	出血多量だったそうですので、後で知りました。身体を害するものとは思いませんでした。フィブリノゲンがどういうものかも知りませんでした。
95	肝炎になって21年も経って、原因が血液製剤だと分かり、自分のこれまで苦しんできた21年間を、病気と縁のなかった21年前の元気な身体に返してほしいと思った。
96	これから先の病気について考えると、常にガンの事が頭から離れません。一生の病気です。でも、子供を産んだことは、全然後悔していません。
97	当時は、まだ害があるかどうか解らなかったのではないかと、自分で勝手に思っています。詳しい事は分かりませんが、私の場合は使用されたのがわりと早かったのではないでしょうか？止血に使われても、仕方がなかったのか？
98	感染後、産科の医師より、たぶん原因はフィブリノゲンだろうと聞いていたので、運命と思って受け入れた。
99	今現在無症候で、普通に生活できていますので、あまり自分がC型肝炎だということを、いつも考えている訳ではないですが、風邪をこじらせたりした時など、肝臓の数値等・・・少し怖さがあります。
100	悪いと知りながら使用させた学者、役所、国は、多くの人を苦しめている。決して許さないと思った。
101	出産時、出血量が多く（輸血 1,600cc）、意識も朦朧としており、もう少し血液が届くのが遅れれば、死んでいたであろうと。当時は、「助けてもらった」「子供が抱ける」という思いが先で、当時としては仕方のない医療行為ではなかったかと。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
102	35 年も病院から縁が切れず、悔しい思いでばかりで過ごしてきました。又、副作用で長年糖尿にかかり、現在もインスリンをしているが、C 型が判明（血清→慢性→C 型）してしばらくしたら、インターフェロンの投与（当時は保険適用外）も医師と何度も相談したが、糖尿があるためリスクが高いと考えられ、断念した。そして、肝硬変、肝細胞ガンとなり、薬、検査、糖尿による医療に、何の補助もなく現在に至る。インターフェロンには負担援助があるが、それ以上進むと、負担額が増すばかりで辛いです。
103	予防的に術前に使われたので（手術の出血は少量）、主治医による人災だと感じた。
104	当時、医師は最良の治療をして下さったと、本当に感謝している。ただ、無害の血液製剤ならもっと有り難かった。
105	昭和 43 年手術を受け、フィブリノゲンを投与され、止血剤として使われた。名前すら知らない薬剤を使われ、これから自分の体がどんなになっていくのか、精神的に不安だった。他の人は元気なのに、治してもらうはずの病気が、それ以上に悪くなっていくなんて、考えられなかった。
106	健康だった私が、インターフェロン治療により、状態が良くなった。今現在においては、あの時にはそうせざるを得なかった状況であろうと思いつつ、その時にしかもらえない娘との時間を過ごせなかった事や、精神的にも肉体的にも、いつも不安で辛い状態であった事を思うと、二度とこのような薬害があってはならないと思うし、カルテのない方が、1 日も早く救済されることを強く望むと共に、和解のために関わって下さった関係者の方々に、深く感謝いたします。
107	血液製剤が使用されなかったら、もしかして今生きていなかったかもしれない。
108	完治の見込みなしと思い、長い目で先生と仲良くしようとあきらめていました。
109	フィブリノゲンが危険な製品なのに、なぜ許可し続けたのか、厚労省の態度が分からない。
110	患者からの申し出があり、初めてカルテを開示するのではなく、危険な血液製剤が使われていた時期が判明した時点で、せめて、残っているカルテぐらいは調べて、病院側から患者に連絡をとるべきではないかと感じました。
111	今は普通の生活をしているので不安は感じないが、再発する場合があるので、病気になる。
112	複雑です。投与されなければ命が危なかったでしょうし、さりとて、新生児を抱えて 1 ヶ月で母乳も出なくなり、育児も困難になり、将来が不安でしたから、何故この子を産んだのだろうと、あれこれ良からぬ事も考えました。
113	当初は詳しいことを知らず、国や製薬会社の無責任なずさんさの実態もよく知らず、どちらとも言えない気持ちもあったと思うが、危険な製剤だという報告を得ながら、なお、その後何年も使い続けていたということを知り、信じられない思いでいっぱいです。
114	詳しい検査の結果、治っていることが分かったので、不安が消えた。
115	事故の外傷の止血のための使用であり、それがなければ死んでいたかもしれないと思うと、仕方がない部分もあるのかなと思うが、加熱製剤もあった事を考えると、もう少し配慮があっても良かったのかなと思う。
116	私の命を助けるために、懸命に手術して下さった先生に感謝しました。看護師の方もとても親切にして下さいました。私の命と引き替えに、子供の命を失った悲しみは大きくて、体調をくずしました。自分の命を助けるために使用した薬で病気になるのは、先生にも分からないことで、責任はないと思います。他の人にうつさないことが、一番気掛かりでした。
117	私はもともと骨盤が狭く、帝王切開で産む予定だったにもかかわらず、血液が用意されていなくて、出血多量が分かった時点で、血液の手配を始めたため、その血液が届く間、止血剤を使用していたとのことで、ものすごく憤りを感じましたが、そういう原因を作ったのも私だが、結果的に命を救ったのも私だと、医者に言われました。
118	自分が何かしたせいで、感染したわけではないという点では安心した。
119	当時、外国では血液製剤は中止されていたのだから、医師が製剤使用前に告げてくれていたら、手術時の数ヶ月前、主人は肝硬変で急死しなかったと、それが残念に思う。又、私も快復後に献血などしなかったのにと、二次、三次感染につながったのではないかと、罪悪感を感じます。
120	血液製剤について、家族も本人も危険ではないかと医師に言うも、国産の製剤で、ミドリ十字だから問題ないと言われる。
121	30 年前の事で何も知らなかったが、体調にかなり影響があり、会社での出張や勤務にかなり不利な点が多かったと思います。例えば出張、高度の労働など。
122	当初、輸血をした人の中でも、病気にかかる人とかからない人がいると言われ、体の弱い人がたまたまかかると思われていたので、原因がはっきりして、やはり私自身のせいではないことてに、ほっとすると同時に、私がかかったことに怒りを覚えた。
123	今インターフェロン治療が終わり、体がすごく楽になった。これまでの何十年は何だったのかと思います。
124	インターフェロン治療を受けるために、休業しなければならず、この治療費と給与補償はないのかと思った。
125	病気を通じて感謝、思いやりなど、かけがえのない心の宝をいただいたので、私にとっては戦友のような感じです。組織や人を恨む気持ちはありませんが、これも国との和解があってのことだと思います。
126	あの時は、輸血しないと助からなかったので、仕方がないと思います。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
127	ショックな思いもありましたが、持病の治療のためになったということもあり、複雑な思いです。
128	25 年以上前の事です。2 人目にあたる担当医が、「手術輸血したら、なぜ C 型肝炎になるのかな？」と不思議に思っていらしたことは覚えています。命を助けてもらっていますし、治療のためですから仕方がないと思いました。ただ、治ればうれしいとは思います。
129	20 年以上治療に専念し、ガンの手術もしましたが、時間の大切さを強く感じます。自分の周りの者にも大変な苦労をかけてしまいました。
130	健康な体に戻りたいと思うばかり。生活費の助けになるようにもっと働きたいが、長時間の仕事ができないため、1 日 4～5 時間で月に 15～20 日位。1 ヶ月の給料は少ないけれど、治療費が要るから頑張って働いています。
131	29 才から 52 才までずっとこの病気との付き合いで、突然血液製剤を使用したことを知り、ショックでした。何のために自分は生まれてきたのだろうと、泣いた日もありました。
132	なぜ C 型肝炎になったのか分からなかったが、テレビや新聞で見なかったら、一生分からなかっただろうなと思いました。
133	血液製剤を打って、出血が止まったかと言われると分からない。打たなかったら死んでいたのか？よく分からない。でも、国と医療関係者達は、危ないと分かっていながら使用させたことは許せません。
134	たぶん、出産の時に感染したと思っていたので、やっぱりそうだったのかと思った。
135	危険製剤が何ら説明なく使用され、その説明がなされたのは 16～17 年経過した後のことだった。この事は絶対に許せないことです。だけと、治療は病院の世話にならなければならないと、複雑な心境です。
136	後半の人生を返してほしい。
137	毎回の検査の結果を聞くのが怖い。
138	緊急事態であったため、仕方ないと思っています。
139	心臓病で命は助けていただきましたが、非 A 非 B 型肝炎と医師に言われ、手術以来ずっと不安でした。仕事もままならず、自分の弟と共に自営業を細々と営業していますが、妻も家を出ました。離婚です。心臓は助かりましたが、肝臓による不安と恐怖で、現在も心配です。心臓と肝臓で、一生を奪われてしまいました。本当に残念です。
140	肝炎の症状があって受診した時点では、C 型肝炎のウィルスは検出されず、非 A 非 B 型肝炎として治療が始まり、S63 年 5 月～H13 年 5 月まで、C 型肝炎としての治療等は受けず、内服薬と 2 ヶ月位に一度の血液検査を受けるだけでした（開業医）。クモ膜下出血の手術を受けた●●●●病院から、血液検査を受けて下さいと書面での通知をもらい、検査を受けて、C 型肝炎と診断された。やっぱりそうかという疑いは、決定的なものになりました。
141	その時は、自分の命を救ってもらったと喜んでました。何の説明もなく、今思えば色々症状がありましたが、無我夢中で生活してきました。義父母の看護から、送り出すまでの闘いも頑張りました。今は家族に支えられ、頑張っています。
142	帝王切開で全身麻酔から覚めてから、「出血がひどかった」と言われたので、その時の処置としては仕方ないと思っていたが、しなければ、違った人生が歩けたのにとの思いはあります。
143	肝炎を発症して 9 ヶ月入院しました。病気の説明を聞き、転院をお願いしましたが、断られました。
144	医師からは、輸血の中にウィルスがいたと聞いていたのに。
145	いろいろな病気がでてきて苦しんでいる。糖尿病、心臓、肝臓。
146	一律救済の前は、期限で切られそうだった。病院は、使ってはいけない時期に使用した。国と病院に殺されるかと思った。
147	私がこの病をもらってからは、特に実母に大きなダメージを与えてしまった。自分の病と母の病、子供を授かったのに、この病のために 2 人中絶することになった。その後、第 2 子を出産できたが、子供に感染するのではないかと、不安が続いた。
148	未熟児であったため、1 日生きられるかも分からなかったと親から聞かされました。今生きていることに感謝しています。
149	無責任です。命の大切さをまったく分かっていない。
150	自分の身にかかった一生の問題だ。家庭の中で笑顔が消えて、体力がないと暗くなっている。気が付くと性格が変わったように思う。明るく過ごさないと、顔に人生が表れてくる気がする。
151	当時は治る可能性があると思っていた。
152	血液製剤とは何なのかさえも知らなかった。私の人生は、こんなはずじゃなかった。家族、特に子供達に大変な思いをさせた。発症した時は劇症肝炎で、一時は危篤になった。もしかしたら私は、血液製剤とは何なのか、何で病気になったのかも知らないまま、死んでいったかもしれない。発症してからこれからの人生、常に病気との闘いになる。インターフェロン治療にしたって、何故自分の体を痛めつけて受けないといけないんだろう。こんな治療しかないのか。受けないと病気は進行する。そうしたら受けるしかないだろう。何故こんな思いをしなければならないのかと思う。危険きわまりない血液製剤が、世の中に出回ったことが許せない。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
153	何故、肝炎なんて病気にかかったのかとずっと思っていた。医師に問題があったのではと思ったこともあったので、真実を知りたいと思った。
154	子供は無事に産まれたので、それだけでも良かったと思い込むしかなかった。
155	持病により、いつも生死の境にいて、生きているのが不思議といった状態を経験したので、何があっても、そんなこともあるのだと思った。子供は 43 才の子供だったので、産院の方々は（何でまたそんな不注意で妊娠、と思われたかも知れませんが）、人為的な選択は、命に対してするつもりはなかった（自分も生かされているので）。授かった命には心より喜び、感謝していました。
156	生まれてくる子どもを亡くしたら、自分は生きているという価値はありません。こんな薬物は酷です。私の娘は今年 23 回忌です。
157	親や兄弟姉妹に、肝炎の病気は誰もいなかったので、なぜ私は肝炎になったのかと思い続けていたので、その原因が分かって、なぜかホッとした。
158	昭和 62 年 4 月、子宮筋腫で、止血剤を 1g ずつ使ったのが、今に至っています。人間の血の数値が 14→7（半分）になったので、フィブリノゲンを使った。
159	国と製薬会社の利害関係で、人の生命を奪う狂った人達だと思いました。不信感で、世の中がひっくり返ってしまいそうでした。目には目、歯には歯という言葉がぴったり合います。とんでもない！許せない！
160	病気になった本当の理由が分かった時は、ショックと同時に、今までの経過が納得できた。20 年以上も経って事実を知るのは、時間が長すぎたと思う。もっと早く分かっていれば、違った人生を歩んでいたかも・・・。ちゃんと治療を受けて、自分の健康と真剣に向き合っていたと思う。
161	医療現場の医師、看護師の方々は、必死で私を助けてくれようと懸命でした。しかし、その現場に汚染された血液製剤が、止血効力もないのに止血剤として当たり前に使用されていたことに、がく然とする。他国で使用中止の時に、日本でも中止してくれていたら、私はこんな人生を送らなくてもよかったのにと思うと、悔しくてしかたがない。
162	C 型肝炎ウィルスに汚染された血液製剤を製造し続け、病院に売りさばいていた製薬会社に怒りを感じた。
163	2000 年の現状として、肝炎はまだ周知されておらず、なめられている疾病だなと強く感じた。
164	当時 15 才であり、薬害が憎いというよりも、病気の重大さ（深刻さ）に心を奪われ、薬害に対する思いは湧かなかった。
165	仕返しをしたいと思った。憎んだ。当時、出血多量で血液製剤を使用した産科医師が、「何で止まらないのか」と怒鳴っていた。製薬会社や厚労省（当時の天下り役員）の責任追及がされていない。国の責任ということで、曖昧にしているのは、今までに亡くなった方々に対して申し訳ないし、私としても許したくない。
166	当時は輸血感染だと思って、命が助かったのだから仕方がないと、自分を納得させていた。止血するために使われた血液製剤で感染したことは、納得できなかった。しかも、効果はなかった。
167	止血目的に使用されたにもかかわらず、結果として出血はおさまらず、輸血をした。止血効果もないものを使用され感染したこと。そして、その血液製剤が危険なものであったことを、テレビの報道で知り、大変悔しい思いをした。
168	自分自身が病気になる（病気を知る）前は、肝炎問題や血液製剤について全く無知で、興味すらありませんでした。病名を聞いて病気を理解していく中、なぜ、私の体にウィルスを入れてしまったのか？防げなかったのだろうか？と疑問に思うようになりました。これからの長い人生、日本の薬事行政についても、もっと勉強したいです。
169	何も感じなかった。そんなに悩んでいない。
170	その当時、血液製剤を打っていなかったら、命があったか分からないと思う反面、その薬しかなかったのか・・・と思う気持ちが交錯しています。今自分のおかれている状況が、無症候性なので、そう思うのかもしれません。
171	色々な意見で大変だった。肝炎になった原因が初めて分かり、これが原因でこんな大変な事になったのかと感じ、製薬会社、病院に憤りを感じた。
172	当時、薬害肝炎訴訟の問題をテレビ等でやっていたので知っていましたが、病院に行ってみるとカルテはもうないと言われ、あきらめていました。しかし、再度病院に行って相談してみると、医事課という所に、自分に投与したという記録が残っていて、感染原因が分かりました。
173	悔しかった。
174	現在、インターフェロン治療により、身体は良くなりました。でも、あの時医師が、家族や私に血液製剤の危険性など説明したとしても、命が助かる事が優先で、許可したと思います。
175	手術後 1 週間で悪寒、発熱、嘔吐があり、何がどう悪いのか全然分からない状態が、何ヶ月か続いた。
176	止血剤を 5 本打っても止血できなかったから、輸血をしたのでショックです。平成元年 12 月に止血剤を使用しましたが、その時には、使用したら肝炎になるのが完全に分かっていたのに、それでもなぜまた使用していたのか分からない。そのため、仕事もできないし、治療費もたくさんいるし、お金をどんどん使って勤めにも行けないし、経済的に家族に大変迷惑もかけ、とても肩身の狭い思いもたくさんしました。

No.	問 3-7 肝炎の感染原因が血液製剤だったことを知った時、感じたこと－その他
177	当時（生後 2 日目）、生命に関わる手術で、成功率が半々だったのを必死に助けて下さった先生にはすごく感謝していて、病院側も国が使用禁止にしていれば使わなかったと思うので、病院に対しては、ただただ感謝しています。
178	山口さん、出田さん、福田衣里子さん達ががんばってくれたから、毎日テレビを見ていた。
179	お産の後体がおかしくなり、あちらこちらと病院を変えては調べてもらい、国立病院、最後には大学病院と何度も何度も入退院の繰り返し。その時は膠原病だと言われました。原因が分からない。輸血をしたからだと思い、先生にも何度も聞きました。納得がいかず、新聞で血液製剤の事を知りました。でも、どこで聞けばいいのかも分からず、何年もそのままでした。昨年、病院から電話をもらい、やっぱりと夫と 2 人で話しました。
180	投与後、子供を 2 人出産したので、子供に影響がないかとても不安。
181	自分の事より周りの人にうつしてしまっているのではと思いました。なったものは仕方がないので、受け止めるように努力しました。早く見つけられたのは、親と原告団の長い間の努力だと思い、感謝しました。
182	フィブリノゲンを使用されて 30 年経過して発病しましたが、最初はそれを使用しなければ出血多量で死んでいたんだからと、感謝していました。
183	当時は、生きるためには必要な処置だったのだろうと信じていましたので、仕方がないと思っていた。
184	S62 年 6 月第 3 子出産時、止血目的に使われた。他に方法はなかったのか？今現在、インターフェロン治療を H21 年 6 月より受けていますが、他の病気治療も一緒に行っていて、毎日体がだるく、これから先仕事に就けるのか不安です（年齢の事もある）。
185	出産後、出血が多く、すぐ気を失ってしまったので、当時のことはよく分かりません。
186	1986 年以前の血液製剤にウィルスが混入しているのが分かっていたのに、繰り返される薬害。どれだけの人々が悲しい、辛い思いをしないといけないのでしょうか。とても残念で悔しくてなりません。
187	とても苦しく残念であり、限りある人生が悲しい。
188	私は正看護師です。第 2 子出産時、医師不在時に陣痛促進剤を（子宮口 2 横指開口の時点で）静脈ラインより側注され、激痛と共に出産し、子宮破裂しました。子宮は出産から 1 ヶ月目に（止血の可能性があると考えられ、温存目的で様子観察していましたが）全摘後、それまでにずっと使用していたフィブリノゲンを投与されました。無念です。それから人生が大きく崩壊しました。
189	手術前から危険な状態であり、99%助かる見込みがないと言われたが、輸血により命を救われたと思い、その 1 ヶ月後に急性肝炎（非 A 非 B 型）になった時も、仕方がないと思った。その後 C 型肝炎となったが、薬害肝炎問題も自分とは関係がないと思うようにしていた。
190	多量の出血のための、やむを得ずの処置だったと思い、病院を恨んだりしていません。
191	輸血も同時に受けているので、いろいろ複雑です。
192	その時の私の出血状態から考えると、使用せざるを得なかったと思う。ただ、子供の感染は気になった。そして、私は今、子供の成長を見守っていける幸せを感じています。2 人目を妊娠した時、出産してもいいと言われ、無事生まれました。医師が処置してくれたことは、良かったと思います。
193	どうして 20 年以上たった今頃（2008 年）、自分の C 型肝炎の原因が分かったのか、どうして今まで知らされなかったのか、はっきりとした原因が分からないまま過ごした 20 年以上のやりきれない気持ちを思い出し、国や政策、製薬会社に対して、本当に腹が立った。
194	原因となる製剤があることを、知っていたにもかかわらず、その治療法を選択した自分を責めた。深夜で失血ショック状態で、判断能力がなかったとはいえ、悔しい。
195	C 型肝炎の告知を受けた時、なぜ、このような病気になったのかが分からず、当時、信頼の置けるかかりつけの医者に、再度検査を受け、確認までした不安が、感染原因がはっきりしたことで少しは楽になりました。
196	必要なものとは思ったが、せめて、もう少し早く使用を中止してくれれば、私は肝炎にならなかったかもしれないと、原因を知った時は、しばらく落ち込みました。
197	そのような血液製剤が使われていることにショックを受けましたが、早い時期に病院からの知らせで検査を受け、肝炎になったことがわかり、不幸中の幸いと思いました。なったのはどうしようもない事実なので受け止めなければならないし、隠せないので、本人に関わる人全てに話をしました。
198	体質が変わり、病気前にはなかった食物アレルギーがあり、食すると呼吸ができなくなることがある。すべて原因があるのでは？と考えてしまいます。

問 3-8-1　病気を理由に仕事を辞めた、あるいは転職した理由－その他

No.	問 3-8-1 病気を理由に仕事を辞めた、あるいは転職した理由－その他
1	役職から社員に異動
2	長期療養に入って 2 年経っても良くならなかったので、退職しなければならないことになった
3	正社員でないため、治療のために続けて休めない
4	親の介護時間も増し、日常生活だけでもとても疲れ、肝機能を気にして仕事に就けない
5	肝炎に感染して 20 年後は肝硬変に進行すると常に不安があり、大事を取り、20 年経過した時仕事をやめた
6	健康診断で肝炎と知られて職場に居づらくなるかもしれないと思うと、正社員の仕事には就けなかった
7	面接を受けに行き、病気が理由で断られた
8	健康診断で
9	正社員からパートに切り換えました。収入は 1/3 に減りました。民生委員をしていましたが、会議や研修に参加できなくなり、辞職しました
10	育休明けで出勤したが、また肝機能が上がり、休職期間も使い切り、辞めざるを得なくなった
11	入院もしたため、1 年間のインターフェースがあるので
12	入退院の繰り返しで、慣れた頃にやむなく辞めて、正社員の一歩手前でいつも断念した
13	最終面接で受かったが、健康診査でひっかかった
14	地方公務員であったため、休職期間が長引き、退職を余技なくされた
15	定期検診に行くのに休まなければいけないので、少ない人数の職場だったので休みにくかった
16	治療費の問題
17	精神的に意欲を失った
18	飲食関係のため、気をつかう
19	体が弱くてアルバイトをしても長く働けない、できる仕事が制約されてしまう
20	インターフェロンの副作用のため
21	入院で出張ができず、辞めざるを得なかった
22	副作用や病院受診に際して、介護職は困難と判断したため
23	医療関係者であるため、仕事の内容にセーブをかけた
24	仕事を休職したが、復帰後もうつ状態が抜けず居づらくなった
25	組織内で部署が変わった。体力、気力、根気がなくなり、将来の地位が下がっても仕方がないと考えた
26	C 型肝炎であることを知られたくなかった

問 3-9　肝炎感染後、経験したこと－その他

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
1	この病気の事を隠さなければならないという気持ちが常にあり、周りに理解のある人はいても、一生背負っていかなければならない。いつ肝硬変に、肝癌になるか不安だが、悩んでいてもしようがない毎日を、頑張ろうという気持ちもある。
2	長いこと治療していますが、あまり考え込んだことはありません。
3	配偶者以外に病気のことは話せないので、周囲は知らない。
4	仕事を選ぶ時。1 日の仕事は体力的に辛いので、半日しか働けない。
5	感染後は病院の先生に「年 2、3 回は肝臓の検査を受けるように」と言われましたが、病院には、子供の友達の親など地域の人がいます。私の事で子供がいじめられてはと思い、家で無理をせずに、ずっと検査をしていませんでした。
6	閉鎖的な町に住んでいるため、周囲には知られないようにしている。
7	両親の介護を長い間体験したが、その間疲れやすい身体をおして、やらなければいけない時が、一番辛かった。自分の身体を気にしないで生活ができたら、どんなに良かったかと思う。実母を施設に預けて、入院しなければいけなかった時は、非常に辛かった。
8	会社の仲間に薬害の話をしていたら、上司が、C 型肝炎の人は調理師には絶対になれないなどと言われ、仲間にも「お～怖い」と言われた。娘が看護師をしているという女性だけが、話をよく聞いてくれました。それから、自分が C 型肝炎だというのが嫌になりました。11 月末に首になったので、会社にも行かなくなり、ちょうどよかったと思います。
9	病名を知られることについての不安があって、いつも心が安定しない。
10	歯医者に肝炎であるというと、嫌な態度をされた。
11	インターフェロン治療中は、家族の仲が悪くなったりした。意志の疎通ができなくなってしまった。

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
12	つとめて周囲には話さないようにしていた。身内には心配をかけるので、悟られないよう元気そうにしていた。協力は甘えになるので、理解されないのは当たり前と割り切っていたので、不満や苦痛の原因にはならなかった。子供には、申し訳ないと思う事がいっぱいあり、思い出すと涙が出る。
13	肩身の狭い思いで、毎日暮らしております。
14	主人は県外で仕事をしていたこともあり、又、病気をしたことのない彼にとっては、治療の苦しさは理解できません。
15	他の人に知られたら、仕事が続けられないので（肉体的な仕事のため）、隠さないといけない。誰にも病気のことは言えない。
16	肝炎に感染したために、出産ができない結果となったのが、非常に辛い日々だった。
17	生活に無理しないよう、心掛けている。
18	インターフェロン治療を遅らせたのは経済的理由ではなく、入院や家事、子育てができなくなる事など副作用の不安からです。
19	体力は同じ 30 才位の人よりはないと思う。おじさん達に、「まだ若いんだから大丈夫」と言われると辛い。
20	兄の見合いの時、私が肝炎であることを問題にされ、私が頑張って元気になろうとしていても、世間の人はもうダメな人間だとしか見ないのかと暗い気持ちになり、更に、兄で問題になるのならば、私の子供が結婚する時、母親である私が肝炎であることは、もっと問題になるのではないかと、自分が生き残って良かったのかと、悲しくなりました。
21	以前、ある歯科医院で肝炎の事を告げると、肝炎患者の人は来てほしくないと言われ、ショックでした。現在通院している歯科医院は、同じ事を告げても、快く治療していただいています。私は、人への感染を心配して告げたのに、初めの歯科医院には、大変驚きました。
22	歯科医で、診療を断られた（2 軒）。
23	主人が C 型活動型で、私からうつったと言っている。
24	近所（友人も）で嫌なうわさが出るのが怖いので、病気の事は話したことがない。そのため、通院している事も話せない辛さがあるし、具合が悪くても、本当の理由を言えない辛さもある。
25	肝炎ではなく、他の原因で体調がすぐれなかったり、寝込むことはあります。
26	家族以外は、感染の事は秘密にしています。
27	以前経験した辛く情けない事は、思い出したくない・・・というのが本音です。
28	病名は家族以外には告げていない。
29	パートで一昨年まで看護師をしていましたが、職場の同僚には、C 型肝炎は感染が弱いと分かっていても、病気の事は話すことができませんでした（上司には、面接時に話しました）。隠しているという自分の気持ちの弱さや小ささがとても情けなく、なんだか申し訳なく、自信を失うこともありました。でも、同じ病気で明るく頑張っている方に出会ったりすると、私も前向きになることができました。しかし、周囲への感染予防に必要以上に気を使ってしまい、疲れてしまうこともありました。肝炎患者は、不条理な劣等感を持って、日々生活していかなくてはいけないような気がします。
30	出産後 1 ヶ月で入院となりました。長女（2 才）、長男（0.1 才）を抱え、家族の身体的、精神的な負担は、想像を絶するものだったと思います。義母は疲労が重なり、大腸ガンでほぼ 1 年後に他界しました。私は、今でもその苦痛から、うつになることがあります。
31	病気の事は、なるべく人には知られたくないし、話さないようにしています。なぜなら、以前歯医者にて、とても嫌な思いをしたことがあるからです。まだまだ偏見はおおいにあります。
32	治療中、具合が悪いと、仕方なくタクシーを利用して病院に行ってしまう。結構タクシー代がかかる（往復）。
33	感染後、職場復帰。職員、知人、友人に病気の事を話し、いろいろ配慮してもらっていた。●●に転居し、インターフェロン治療後、就職活動。病院に看護助手として内定。後に病気の事を話したら、内定取り消しとなる。その後、他の病院に勤めることになったが、病気の事は、職場では話さないようにしてきた。退職してからは、意図的に話さないことはなくなった。
34	出産後に感染したのですが、当時は主人の理解がなく、家事、育児がとても辛かったけれど、誰にも相談できず、1 人で耐えていたことを思い出すと、とてもお金で解決できる問題ではないと思う。
35	・近所の嫌なうわさは聞いていないが、子供の友達の母親（看護師をしていた）に、自分の子供と私の子供とのつきあいを、遠ざけられたことがある（肝炎の話をしてから） ・人との付き合いは好きなのだが、肝炎だと分かれば嫌がられるかもしれないと、肝炎の話ができない（過去の経験から）
36	家事ができず、寝込む日が多く、小さい子供の面倒はみられず、離れ離れになり、実家に約 1 年子供を預けた。子供の学校の行事も不参加が多く、家族に大変な迷惑をかけた。そのことが、今も一番心苦しい。
37	両親が責任を感じている。国が責任をもって感じるべきだ。
38	動ける時に動きすぎて、その反動で動けなくなり、寝込んでしまい、周囲の人の理解がなく、仮病だと思われるのが辛かったです（子供の学校行事、運動会、学年レク、遠足、学芸会等）。
39	健康診断を受けたくないという経験がある。

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
40	朝、時々起きれないことがある。
41	三女 1 人だけが、ある程度肝炎を理解しているようです。
42	・歯科医院で、歯の治療をするのに、問診表に C 型肝炎の有無についての質問があり、正直に記入したら、治療を断られた ・病院に入院した時、他の患者さんとは違う扱いを受けた。ばい菌扱いをされた感じです。
43	当時の治療方法としては、横になって寝ているということが、一番と言われ、来る日も来る日も寝て過ごす毎日。足の筋肉が落ち、弱ったことが悔やまれる（遠距離、団体行動不可能）。
44	インターフェロン治療と訴訟するまで、以前の医師を探すので、タクシー代（体調不良のため）やらで、今でも借金があります。
45	出産時に感染して、内科で 3 ヶ月入院して治療を受けた。退院して、治療しながら子育てを行ったが、体が疲れて洗濯、掃除等、ひとつひとつの家事を休みながら行い、辛かった。そのうち、子供が動き回るようになり、子育てが大変だった。唯一の楽しみは、子供の昼寝の時間でした。だるくてだるくて仕方がありませんでしたが、H3 年に、●●●大でインターフェロンを行い、完全には治りませんでしたが、それから体調がすごく楽になりました。
46	75 才の義母、80 才の義父、83 才の義祖母を抱えているので、治療の成果をひたすら祈りました。主人と 2 人の子供（大学生）に辛くあたる日々があり、涙する毎日でした。現在もスマイリー10mg、セルシン 2mg、デパス 5mg は毎日服用しないと、不安です。
47	感染後、早い時期にインターフェロン（出産後 4 年後）を 1 回やり、2 回目もやりましたので、結果は出ずとも、肝機能が落ちついています。日常生活は、仕事も健康な人と変わらないと思います。年とともに肝機能が下がっていくのかと、それがとても心配です。
48	38 年＝私と家族が C 型肝炎と闘ってきた年月です。そして家族には、心配と迷惑をかけた年月です。そして、これからもこの闘いは続くのです。健康を奪われた、仕事も続けられなくなった、この苦悩が分かりますか？
49	産後、急に自分の身体が宙を浮いたようになり、フラフラと、毎日がとても苦痛であった。原因が分かり、更に将来に対しての不安が広がった。しかし、全国原告団として活動することで、弁護士のサポート、原告団同志の結束に、どれだけ支えられてきたかを、今強く感じている。
50	医療関係者の人には、すすんで感染の事実を打ち明けているが、一度だけ、歯医者で露骨な差別を受けた。私以外の人には、かなりきついと思う。
51	家事に無関心だった夫が、よく手伝ってくれるようになった。
52	入院時、幼児を母親や姉たちに預かってもらって、養育してもらいました（0 才）。他の家庭にもご迷惑をかけてしまい、一生の心残りとなってしまいました。
53	夫とは離別。肝炎が直接の原因とは思わないが、関係がないとするのはウソになります。表面に出せない、出されない中での苦しいものが多々ありました。夫の家族等の関係の中では、十分に理解を得られないまま、許されるような負い目を抱く付き合い、次第に疲れました。肝炎の事を世間は知らなかったから、子供に十分に接しきれない身体を、とても苦しみました。母親として、一番可愛い幼い時代に、身体が悪くてながめて過ごしたことは、今も悲しいことです。
54	心不全の持病がありますから、肝炎のみの症状とは言えないと思います。現在 85 才と高齢で、肝炎の進行も遅いと思いますので比較的安心していますが、鼻血が出たり下血したりすることがあって、その他血液に対しては、家族など介護する人に感染させないかと心配になる。
55	仕事に行きたくても、週に 3 回病院へ通院していると、仕事にも行けなくて苦痛だった。
56	母親は子供に寝姿を見せるものではないと頑張っていたが、仕事と家事に追われて、横にならずにはいられなかった。ダメな母親だと自分を責めていたように思う。健康ならば、もっと十分な事ができたと思うと悔しい。
57	仕事をしているので、自分の病気の事は、本当に親しい人以外には話していません。C 型肝炎は、うつる病気だと思っている人もいます。
58	肝炎に対する国の対応が遅い（救済）。20 年余りこの気で苦しみ、未だに治療費等の無料化、障害手帳交付等もなく、インターフェロンの効果もなく、肝癌で苦しんでいる人の救済を、早くお願いします。
59	肝炎と診断される前、家族に怠けていると思われていることが、とても辛かったことですが、診断後は支えてもらったことも事実です。
60	私の周囲（友人）はちゃんと理解していて、協力してくれました。夫の両親には、病気になったことさえも責められました。理解するということが大切なので、みんなが理解することが大切だと思います。
61	疲れやすいのは勤勉でないからだと、自分自身でも思いこんでいたところがあり、後悔と反省が多かったです。肝炎と分かってから 10 数年後、離婚しましたが、私の体調も遠因だったと思います。
62	自分自身、わりとポジティブに考えようとしています。体がしんどいのは病気のためと、なるべく思わないようにして、他の楽しい事を考えようとしています。
63	・親戚と同席の時、遠回しで食事を別にされた。水炊きとか寿司等、とりばしに気を付けている。 ・肝炎後、すぐに糖尿にもなり、兄弟姉親戚等、周りに病人がいないので、怠け者とか言われた ・30 才過ぎで、周りに肝炎とか糖尿の人がいなかったため、よくいろんな意味で差別された

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
64	3 人の子供のうち、上の 2 人の出産時、妊娠中、出産後、感染について非常に気を使った。特に、長男妊娠時、インターフェロンの治療中で、出産すべきか迷った。地元を避け、両親の親しい姫路の産婦人科医に、場合によっては堕胎も考えて相談しに行ったら、「せっかく授かった命なので、片腕でも産んでやりなさい」と言われた。もう 1 人に相談しに行った時、流産しかかって、そのまま姫路で入院し、強ミノの治療をしながら、出産までお世話になった。
65	C 型肝炎から現在肝臓癌になりました。輸血さえしなかったら、こんな病気にかからなかったのに。いくら思っても残念です。血管は細くなり、採血の度に検査針でつついても逃げてしまい、その度に 3、4 ヶ所をつつかれ、痛い思いをしています。すべてフィブリノゲンのせいです。このように苦しんでいる状態です。
66	子供が、出産時の出血で C 型肝炎になったのは自分が原因だと、精神的に傷ついている。話題が出るたびに落ち込む。
67	同居の義理の父が、私より後に C 型肝炎であることが判明した時、私から感染したのではないかと言われ、不愉快な思いをしました。
68	歯の治療をするのに、人に感染させてはいけないと思い、治療を我慢していたところ、もう手遅れ状態で、何本も歯を抜くことになってしまった。
69	体力に自信がないため、少しの体調不良でも過敏になり、「全般性不安障害」になり、現在も心療内科で治療中である。
70	今は 24 時間暇ですので、しんどい時は 1 日中寝ています。外出中に急に疲れで出るので困ります。
71	子供が私に、「自分が生まれなかったら、病気にならなかった」と言うことが何度かあり、「そんなことはない」と応えるのですが、負担に感じているのかと思うと辛い。
72	新しい生命保険に入れない。
73	子供を亡くしたことにより、体調不良になりました。今もまだそのための治療を受けており、年に 2 回のエコー検査、肝機能検査も受けていましたから、すぐに早期治療を受けることができ、悪化することのないように、年を重ねてこれたと思います。たくさんの人に支えていただいて、今があります。
74	主人が転勤族のため引っ越しを繰り返し、何人もの医師にかかりました。検査の結果が悪いと怒られたり、普通に生活していましたと言うと、あなたは病人なんだから、普通の人がすることすらできないんだ、と言う人もいました。そんな中で、ある 1 人の先生と出会いました。検査結果に一喜一憂していると、医学の世界ってすごいんですよ。みんな寝る間も惜しんで研究しています、大丈夫です、絶対に治る薬ができますよと、いつも励ましてくれました。その言葉どおり、インターフェロンができました。
75	今まで 3 回治療を強要されましたが、その都度自分で健康管理をすると断り、もう 30 年が過ぎました。ウィルスと共に、食事、運動、生活を主体にしたボランティア活動を、これからも治療の一環として、していきたいと思っています。
76	たとえどのような症状があっても、生活、仕事を優先はしないと生活できなかった。また病名も、生活のため、家族以外に告げたことはない。
77	夫が感染してしまい、自責の念を感じます。
78	この病気の苦しさは、人には決して理解されないと思います。
79	病名は今では誰もが知っているので、自分が肝炎であると隠す必要がなくなったが、人からは見えない病気なので、怠けていると思われるのが辛かった。
80	退院後は体を休め、治療することに重さをおき、漢方薬を何年も飲み続けた。
81	病院に行くと、うつる病気なので嫌がられないかと心配。近所の人に知られないか心配。近所の病気に行くと、知っている人が「どこが悪いの」かと聞かれるので、インターフェロンも 1 日おきに打ちに行っていましたが、ひと駅先の病院まで行っていました。
82	病気をしてからは、特に健康管理について、人とよく話すようになりました。諸々の病気を持っている上に高齢ということもあって、家族がより気を付けてくれます。家族愛が増したといいますか、私を元気付けてくれているように思料しています。苦しさはあるが、このような家族に支えられて、病と闘っております。
83	私の場合は、産後に急性肝炎を発病し、その後キャリアではあるが、肝炎としての症状は全くありませんでした。
84	医者から、いつも注意するように言われます。今後は安静にするように、あまり無理をしないように、GOT、GPT の検査を受けるようにと。とかく無理をしますと、体調不良と体全体が痒くなります。又、伝染を心配し、僕が妻との性生活を拒否したことが、離婚の遠因になりました。愛する人に感染させることはできません。肝炎発症時に、医者か看護師に sex はしないように言われました。当時は B 型肝炎も疑われた記憶があります。
85	潔癖症の自分が「ほこりでは死なないから」と自分を納得させて、家事も手抜きばかりとなった。
86	自分の体調は、自分にしか分からないと思うので、体調の悪い時、気分の悪い時など、素直に聞いてもらいます。今は主人頼みです。よくしてくれます。
87	全て体調を基準において、行動を決めていくようにしているが、旅行、研修等出張の時など、きつく感じます。

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
88	58 才で発症し、会社を退職せざるを得ず。収入がなく、医療費もなくなり、妻のわずかな給料で生活していましたが、親戚から借金をして医療費を作りました。この生活が 22 年続き、現在もわずかな年金で暮らしていますが、今度入院になれば、入院に余裕がありません。あきらめる以外にありませんね。
89	病院窓口で、C 型肝炎の検査を頼んだ時、さっと席を去られた時にショックを受けた。
90	去年 10 月にインターフェロン治療で副作用が強く出て、体調が悪化して以来、私自身の心の内を全て家族（特に夫）にぶつけました。それ以来、家族皆が協力的に、私に接してくれるようになったと強く思います。自身の病と実母の介護、子育て、主人の仕事（大工）の手伝いを続けてきて、現在は精神的に疲れ、精神科治療も受けています。自立支援で週 3 回月、水、金各 2 時間ヘルパーさんに家事を助けてもらって生活しています。去年 10 月に主治医から、5 年以内に肝硬変か肝がんになると言われていて、今は、少しでも楽な最後が迎えられるよう、願うばかりです。
91	子供に病気の事を話す時、治療を受ける話をする時が、すごく辛かった。今まで、病気の事を自分 1 人で抱え込み、胸の奥にいつもあったから、子供の成人と同時に、もう 1 人は結婚が決まり、その時に話したが、すごく辛かった。
92	急性肝炎にかかった時、同居する夫の両親に体調不良を理解してもらえず、怠けていると思われ、非常に辛かった。今は症状が落ち着いているので、このような事はありませんが、病気の事は、会社の人など他の人には知られないようにしている。
93	持病がありながら、色々身体のことを考えず働き過ぎ、やりすぎた。健康が普通の人の半分以下でも働ければ嬉しいし、動ければ嬉しいと思ってきたが、良かったのか悪かったのか。良い事もあり、悪い事もあり。身体には、酷使したことを心よりお詫びしている。これからは、精神的に考えるのではなく、身体と仲良くし、身体をいたわり、自分の中で調和のとれた生き方をしていきたいと思っています。
94	私は現在通院もしていません。今年 6 月まで●●●●に 1 人で住んでいましたが、別居（約 15 年）していた夫と生活をすることに。家族間で話し合いの上、共に住むため●●に引っ越しましたが、夫の借金、住宅ローン、税金滞納等、自分の選択した今を後悔しています。治療に専念などできる状態ではありません。
95	家族に病気をうつしてはいけないという気持ちで、いつも不安な日常生活を送っていた。職場の健康診断で検査の数値を知るのが、怖くて仕方がなかった。生命保険にも入れず、生活の不安をいっぱい抱えての 20 年だったと思う。薬害が新聞、テレビで報道された後、自分の被害を知り、しばらく精神的に不安定になった。出産後、しばらく入院したことを知っている近所の人から、声を掛けられドキドキした。「うわさがたつかも知れない」と思い、あまり触れないようにしていた。仲の良い人に自分から話をした時、「やっぱりそうだったんだ」と声を掛けられた。報道の力のすごさにビックリ。遠く離れている学生時代の友達からも、心配した便りをいただいた。あの時の市民の反響はすごかったのだと、つくづく思う。
96	現在は、周囲の人々もカミングアウトしている。ただ、インターフェロンの副作用で、うつ状態が続行しており、治療中であり、非常に苦しい（家計的にも）。
97	肝炎感染時に 6 ヶ月入院。その期間に主人も病気になってしまい（精神的）、家族がバラバラになり、子供 3 人は夫の母と私の母にお願いして、みてもらいました。とても辛くて、どうしていいか分かりませんでした。
98	体がきつい時、食事の用意がつらいと出前を取る。何度か続くと家族のイヤな顔になる。がんばって作ろうと心では思うのだが、できない時、このイヤな思いはどこに捨てにいけばいいのか？と思う。
99	家族は健康なため、病人の気持ちは分からないので、具合が悪くても言わなくなった。
100	仕事を持っているが、治療のために休むことができず、辞めなければならないのか不安である。病気は会社の一部上司しか知らせていない。上司に迷惑がかかりそうなので、不安である（医療関係の仕事）。
101	あまり目立った症状がないため、家族に理解、協力が得られず、怠けていると思われるなど、ずいぶん辛い思いをした。病気だと認めてもらえず、病院にも、治療費がかかるので行きづらかった。
102	肝炎対策として、ペグインターフェロンを収入に応じて 1 万、3 万、5 万円と治療費を助成していただき、皆様と国に感謝しています。この注射は副作用がひどく、勤務ができるか心配です。68 才という高齢のためでしょうか、つらいです。でも、後 3 本頑張ります。
103	例えば、歯医者に行くにしても、わざわざ遠い病院に行ったりと苦労した。C 型肝炎と書くのが辛かった。
104	当時、インターフェロンなどなかったため、治療で次々とお金がかかり、カードローンなど使用した。当時は主婦だったため、若い頃の貯金を崩しローンを払い、本当に苦しかった。両親がローンを払ってくれたが、体もしんどいしお金も楽ではなく、本当に悲しい気持ちでいっぱいだった。
105	インターフェロンを受ける前は、GOT、GPT 数値が上がってきて、少し倦怠感がありました。手術して 10 年は何も知らず、献血で C 型肝炎と知らされてからも、GOT、GPT の数値は低く、医師からも様子を見ようということで 10 数年。強ミノとウルソで治療を続けてきました。その間は体調にあまり変化は感じられません。
106	・他人に迷惑をかけないよう、公共の乗り物に乗っていません ・具合が悪くなるのが怖いです
107	周囲には、C 型肝炎だということを知られないようにしているため、苦痛に思っている。

No.	問 3-9 肝炎感染後、経験したこと－その他
108	嫁ぎ先が農家のため、仕事をしなければ風当たりがきつく、体がだるくても無理して働くと、後が大変で、寝込む日が続き、大変な思いをしました。お産の時に死んだ方が良かったと、何度も思ったことがありました。でも、子供も成人式を迎えます。とてもうれしいです。
109	会社も事情を分かってもらえて、休みや勤務先も通院できるよう考慮してくれて、精神的にも負担が軽く、治療を続けることができ、仕事も続けて頑張ることができた。
110	もともと持病を持っていたので、肝炎が判明しても、生活に変化はなかったように思います。
111	何年か前に 1 人で病院まで行って、電車の中、タクシーの中で具合が悪くなり、大変な思いをしました。それからは、夫が仕事を休んで病院に連れて行ってくれます。月に 1 回、大きい病院。後は近くの病院で、週に 3 回点滴、注射をしてもらっております。家族に迷惑をかけています。
112	インターフェロン治療中は、仕事を半分にセーブして、家にこもりがちでした。感染が分かった当時は配偶者がいましたが、感染が分かってから、配偶者への感染の不安などから離婚しました。
113	日常生活には問題なく、検査入院 10 日程度を何度か経験。年に 1～2 回、定期的に体力低下で仕事不能となる。
114	なった人にしか分からない部分もあるが、まずは病気の事を受け止め、前向きに生きるようにしようと思いました。
115	医療従事者だったので、なおさら周りに気を使った。
116	私のまわりの人々は、みんな親切だったのを感じいてます。
117	半端な体調なので、いつも病気の事を気にして、思い切った行動ができない。そんな自分に割り切れなく、イライラすることが多く、ストレスになる。
118	周囲の人に病名が分からないようにしている。
119	肝炎と分かったのは 10 才の時で、子供でした。覚えていないというのが正直な話で、ただ、毎月病院へ行くのが辛かったし、いやだったことを覚えています。
120	医療職のため、病院全体で私を気遣っていただき、1 年間休職扱いにまでしてくれて、感謝しています。やはり、職場環境が C 型肝炎にとって最大のものであり、今後の仕事上の立場も気になる。
121	子供は脳性麻痺なので、横になっていることが多く、あまり苦痛は感じていない様子です。
122	昭和 56 年肝炎になり、退院後は色々な経験をしましたが、2、3 年後から生活、食事に気をつけたので、症状はなくなりました。
123	一般の人は C 型肝炎と B 型肝炎の違いがよく分からない上、家庭内感染すると思っている人が多い。弁明するのも疲れるので、病名の事はあまり自分から言わないようにしている。
124	やはり、日常生活が不自由だ。
125	朝起きる時に、経済的な事、いつまで生きられるのか、いろいろ考えてうつになる時が多い。今は仕事をしていないので、怠けているみたいで・・・。
126	・肉体労働ができなくなった ・思い切りスポーツができなくなった ・食べ物を気にしなければならなくなった ・いつ具合が悪くなるか分からないので、旅行などを避けるようになった ・アルコールを我慢しなければならない ・たくさん食べなくてもすぐに苦しくなるので（お腹がいっぱいになる）、食事会に行くのが苦痛になってきた
127	以前は、C 型肝炎に感染していることを、隠す気持ちが働くことが多かったのですが、最近では、大々的に取りだたされるようになり、周囲の型のいたわりを感じるようになった。以前は、マイナス要素が強かったし、感染原因が明確化されていなかった。
128	治療中、治療後しばらくは、落ち込みやすかった。
129	生まれた直後に感染したので、具合が悪くても、肝炎と結びつけて考えたことがなかったので分からない。
130	インターフェロンを打つようになって、特に苦痛が多くなった。
131	誰にも知られたくないので、夫、子供にしか C 型肝炎を伝えていない。

問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他
1	急性肝炎で即入院だったため、治療に専念した。
2	たまたま行った人間ドックで分かり、使用時から 13 年も経っていたので、こんなことがあるんだとびっくりしました。ただ、吐き気や倦怠感を感じることが今まであったので、それが肝炎のせいだろうと分かり、少し気持ちが楽になりました。元白血病患者としては、まだ病院と縁が切れないんだなと思いました。
3	「退院しても、10 年後、20 年後に慢性になり、肝癌になっていきます。必ず年 2、3 回検査をして下さい」と病院の先生に言われました。このウィルスが身体にある以上、いつか身体の中で暴れだし、肝癌で死ぬんだと、目の前が真っ暗でした。辛かったのは、子供の年と自分の命の長さが、反比例していくことでした。子供には絶対に感染させてはいけないと、心に刻みました。世間にも絶対に知られないようにと思い、後ろ向きな心で、家の中は暗かったです。
4	現在、肝癌その他が急激なスピードで進行中であり、その治療を早急に確実にしてほしい。時間がないのである。
5	肝炎に対する知識が乏しかったから、本を読み勉強した。病院や肝炎の会などが主催する講演会にできるだけ参加した。一生抱える病と覚悟し、うまく付き合っていこうと、自分と家族に言い聞かせた。医学は日進月歩。いずれ良い治療薬ができると思った。
6	不安なので、マラソンをパタッとやめた。
7	息子が高 1 で、娘が 5 才（保育園）。借家住まい、貯金なし。働きたいのにできなくなるなど、お金のないのが辛かったです。入院している時、シーツに少し血液が付くと、見舞いに来てくれた人に感染ると思い、看護師に何度も取り換えてもらっていました。何故こんなことになったのか、原因が分からないから怖かった。ベッドの足元や頭の所に、「血液」と書いてあったので、血液の病気なのだと、何となく分かったためです。あの時の気持ちは、相当酷かったです。
8	いっそ、国が殺してくれた方がまだましだと思ったこは多々ある。それができないのなら、国民全体を肝炎に感染してもらい、国民全員でこの苦痛を分かち合えればと、考えたことも多々ある。
9	第 2 子出産後の発病だったため、途方に暮れた。あの当時のことは、もう思い出したくないほど辛いことだった。
10	被害を受けたショックよりも、この先この病気とどのように向き合って生きていくか、生まれたばかりの息子と家族にとって、何がベストなのか、しっかり考えなければという気持ちが、とても強かったように思います。もちろん、不安や恐れでいっぱいの時もありましたが、「負けたくない」「病気にも、弱い自分にも負けたくない」「病気では死なない、寿命で死ぬのだから」と、自分に言い聞かせていました。
11	インターフェロンを 2 度受けましたが、その時は元の体に戻ったかと思いますが、数年後に、又、数値が上がり治療。10 年、20 年と年数が長くなると、進行も早くなると言われました。今後、再発しないかと不安な日々を送っています。
12	・子供達が小さかったので、死んでいられないと思った。子供達を残して死ねない。 ・離婚した 肝炎を発生してからまる 22 年が過ぎ、当時の気持ちはきっとこうだったと思う。
13	当時、医師からの十分な説明がなかったため、この先身体がどのように変化するのか、大変不安であり、毎日の生活も落ち込んでいました。家庭内が、暗くなっておりました。
14	結婚して子供ができてから、肝炎が分かったので、どうやって家族を養っていこうか悩んだ。
15	25 才で出産して、当時の辛い気持ちが答えをはっきりできず、アンケートの回答の訂正が多くなってしまった。
16	産後の辛さは、自分がだらしないからだと情けなかった。しかも、夢であった職場を去らなければならない程、体がだるかったのは、薬害、血液製剤であったと知った時は、無念の一言だった。
17	1 日 1 日を無理しないようにセーブして生活してきたので、やり残した事がいっぱいあるように思う。やりたかった事、身体優先のため、あきらめた。子育ても精一杯できず、子供にとても可哀相な思いをさせたことへの、責念の気持ちがずっと心に残っている。
18	当時、白血病だったので、更に C 型肝炎になったことで、本当に生きて家に帰れるか不安になった。
19	あきらめ
20	出産時の出血で肝炎になってしまったため、その時生まれた子供が、「ママが病気になったのは私のせい？」と泣きそうな顔で聞いてきて、「違うよ。その時の治療のせいだから、○○ちゃんのせいじゃないよ。元気に育ってくれて嬉しいんだよ」と言って、抱きあって泣きました。その時私は、絶対に肝炎では死なない（死ねない）と思いました。肝炎が原因で死んだら、この子が自分のせいでママが死んだと自分を責めてしまう。絶対に、そんなことを思わせてはいけないと思いました。
21	C 型肝炎になったことで、主人との関係が悪くなった。
22	平成 22 年 1 月には 83 才。高齢者ですが、あと 2、3 年は頑張りたいと思います。
23	肝臓癌で死ぬのは怖い。

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他
24	肝炎と言われても、人事のような気持ちで聞いていたように思いますが、将来が不安になり、子供も産めないのではないかと、とても不安になったことを思い出しました。
25	肝炎を患った時期から、回復の方向に進んでいても、10 年間は 3 ヶ月おきに肝機能検査を行ってきた。その後は 6 ヶ月おきになり、2000 年からは 1 年おきに検査を行っている。検査結果を聞きに行くのが怖くて、不安がいっぱいである。
26	その当時は、それほど重大な病気とは思っておりませんでした。
27	病気と共に生きるだけ生きる。
28	4 才で感染が分かり、子供には病気の説明はしてこなかった。ただ、自分の血液は自分で始末するようにとだけは、十分話してきた。歯ブラシ、針、カミソリ、鼻血など。中学 1 年の終わりから 1 年間治療し、以後、ウィルス（-）で経過が良く、部活動もできるようになってきた。本人は今のところ、深刻に考えていない。今は、受験勉強で余裕がないようです。
29	どうして！私が何かした？検査結果の通知の宛て名を何度も確認したが、私の住所と名前に間違いなかった。主人は C 型肝炎の知識が全くなく、勉強しようともしなかった。一緒に生活する上では、いろいろ意見の違いが出てきた。
30	子供を死産した後、その状況から自分が立ち直ることと、上の子供（2 才）の世話で、ほとんど余裕がありませんでした。また 2 年後には、次の子供を出産しましたので、本当に多忙な日々だったと思います。私が肝炎で気持ちが沈んでしまったのは、平成 9 年。落ち着いていた血液検査の結果が悪化し、再度検査を受け、その際、C 型肝炎と診断された時です。それまでは、「もしかしたら・・・」と思いながら、他の原因で一時的に肝機能が落ちただけだと、自分をごまかしていました。色々な情報で、C 型肝炎は深刻な病気ということは知っていましたので、自分がそういう病気だということを受け入れるのが、とても辛かったです。又、平成元年に次の子供にも恵まれましたので、その子供に感染したのではないかという不安がありました。そのため、診断を受けた後は不眠気味となり、2 年程神経内科を受診していました。その間は将来の不安で、絶望するこもありました。若い頃、看護させていただいた肝ガンの患者さんが思い出されて、仕方がありませんでした。肝臓破裂で腹部に血液が溜まり、亡くなられた方。肝性脳症で、夜中に突然書道をしていた優しい患者さん。静脈瘤破裂で長期入院されていた方等、本当に壮絶な闘病でしたので、友人とは、「肝炎だけにはならないようにしないとね」と話していました。その方達と自分が重なり、自分から逃げ出したくなる時もありました。主人と相談し、子供には 18 才になったら（高校卒業）話して、検査を受けてもらおうということに決めました。そして、2008 年 2 月、大学受験を終えた子供に話しました。薬害肝炎の原告の方々が、国と和解した直後でしたので、子供も、肝炎の事を少しは理解していたようで、泣きながら話を聞いてくれました。夏休みに検査をして、ウィルスは陰性とうことが分かり、家族皆で喜びました。今は何かにつけ、相談に乗ってくれ、励ましてもくれています。
31	取り敢えずは、母なし子にならなくて良かったと思いました。ただ、日が経つうちに、子供が歩くまで生きられるか、学校に入るまで・・・等々、常に死と隣り合わせでした。生きていたいと思いました。
32	肝炎のために、7 ヶ月入院しました。死ぬに死ねない。子供達のことを思うと、入院中も泣いてばかりの日々でした。
33	当時、長女 2 才、生まれたばかりの子を残し、長期入院していました。今思い出すだけでも辛いです。身内に大変迷惑をかけました。
34	発病以来約 27 年間、月 1 回の割合で通院、検査。薬は毎日飲んでおり、一時は肝硬変一歩手前と言われ、入院治療を勧められましたが、費用等の問題があり、食事療法とか漢方の針に通ったりして、何とか GOT 等の値が 100 以下になり、現在も通院しております。
35	とてもショックで、希望がなくなり、死んでしまいたいと何度も思いました。しかし、2 人の子供のために、20 才までは必死でやってきました。今は、2 人とも 23 才、28 才になり、子供達の事は、少しホッとしています。
36	当時の国の責任者も同じ苦しみを味わってほしい。
37	肝硬変、肝ガンになって死んでしまうんだと、目の前が真っ黒になり、病気と闘う気力がなかったです。
38	知った当時の気持ちではなく、知ってから治療をして、ウィルスが検出されなくなった期間の中で、感じた気持ちで回答しました。知った当時だと、肝炎についての知識が少ないので、ここに挙げている気持ちのほとんどが、考えてはいませんでした。
39	肝炎の事は、まだよく分かっていなかったため、療養すれば治ると思っていました。ただ、子供が 3 才と小さかったので、外へ連れ出してやれず、不憫に思いました。当時は、肝炎という病気でも、人に話すことに後ろめたさは持っていませんでした。
40	見かけは元気そうに見えるので、「何故仕事ができない！」と家族に言われたりした。二度と治らないと知り、入院中から夫と不仲になり、自営業も廃業。それまでやっていた茶道教室、ピアノ教室も病気が治る保障もないのでやめたり、他にも着付け、華道もしていて、一部資格を取得しておりました。書道も、あと 7 年位で教室を開けるところまできていたので、思い出すと、今でも悔しさが込み上げてきます。私達夫婦と子供の道も断たれた悔しさは、想像を超えます。夫とは、急性肝炎発症から 1 年で離婚しました。

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他
41	出産して 1 ヶ月検診で、数値が上がっていることが分かり、即入院でした。絶対安静で、ベッドに横になっていることしかできなくて、ひとりで涙がこぼれていました。産科の病棟に入院したので、同じ病室の人達は、赤ちゃんにおっぱいをあげたり、うれしそうにしているのに、私はなんで？という気持ちでいっぱいでした。一番辛かったのは、母乳を飲ませてあげられないことで、母乳は出るのに、冷やしてわざと止めなくてはいけないことでした。主人、家族の人達、実家にも子供はお世話になり、迷惑をかけて申し訳なかったです。
42	肝炎と聞かされても恐ろしい病だとは、何も知らなかった。両親は血圧が高く、血圧の心配、又、伝染病として結核、エイズ、ハンセン病と、我が世代は聞かされていた。ずいぶん誤った伝え方を国民にし、大変な病気を引き起こしたということに、怒りを覚える。
43	感染当時は、よく病気について理解していなかったため、必ずみんながんになるのではと、落ち込んだ時もあった。
44	和解すれば、生活保護は打ち切られ、借金返済をして、残金がどのくらいあるのか不安であり、支援法が頼りである。
45	当時は、肝炎という病気がどんな病気なのか、詳しくは知らなかったと思う。とにかく、何とかして治りたいと思った。ただ、子供が小さかったので、子育てに夢中になり、生き甲斐にもなり、励みになりました。主人も理解があり、家事など助けてくれました。
46	出産後、1 ヶ月目の出来事だったので、上の子供と 3 人で死にたくなりました。
47	病院を訴えようと思いました。
48	母子感染している可能性が強いので、その子供の今後の健康状態が気になる。子供にもその可能性があることや、検査を受けることが言えないでいる。
49	自分の体は大変な事になっていると、新聞、テレビ報道で知りました。どう動けばいいのか分からず、たまたま隣町に肝臓の専門の先生が赴任してきて、色々相談しました。1 ケ所では納得できず、隣の県に行き検査をして、同じ結果でしたので、近くで治療を始めようと決めました。子供も 1 才半でしたので手もかかり、自分の体の事が不安で一杯でした。インターフェロンも試験段階で、未知のものである（試験的にやっていた方もいました）。専門の先生がいた事は、とても心強かったです。何でも話をすることができたこと、幸せに思います（今はご病気で亡くなりました）。
50	肝炎を初めて知った時は、この先どうなるのだろう？の気持ちでいっぱいでした。
51	肝炎に感染したと知って、本人はもちろん、周りの人（夫、夫の実家、親戚）全員から、もう死ぬのではないかと思われ、それからずっと、「体の弱い人」というレッテルを貼られている。自身は、肝臓の勉強をしたりして前向きに考え、生きてきました。周りの人々からの変な目線や考えに、何もかも嫌になったが、離婚をしても、自分 1 人では生きていけないと考えて、嫌いな人々の中にいて、耐えるだけの今までの人生でした。肝炎＝耐えるです。
52	出産時に感染してしまった人は、自分の事だけではなく、子供の問題もあるので、精神的にも肉体的にも、とても大変だと思います。人生で一番幸せな時期が、一変して絶望的になるのですから、それを受け入れて前向きに生きていくには、本当に大変なことでした。ただ、私が一番恐れていたのは、その事の実質を子供が知り、罪悪感を持つことだけは、あってはならないと、いつでも明るく、息子を授かった喜びや幸せだけを話してきました。
53	どうしてこんなに体調の悪い毎日が続くのだろう？どうしてこんな病気になってしまったのだろう？自分が不摂生をして病気になったのならば仕方がないが、何も悪いこともしていないのにと、悩みました。この当時は、まだ治る病気だと思っていました。
54	出産後の突然の入院であり、慢性化すると治らないと医師に言われ、絶望した。
55	ガンにだけはなりたくなかったので、47 才になったら死ぬつもりでした。そのつもりで、警察に調べられてもいいように、エコーに書いた。そうしたら、怒られた。今は笑い話だけれど、あの時は真剣だった。
56	死んでしまいたいと思ったのは、IFN という辛い治療を受けたにもかかわらず、完治しなかった時です。生きていても、家族のお荷物になるだけではないかと考えました。
57	今から思うと、肝炎に対する知識が何もなく、無知そのものであった。
58	色々思い、表現できないくらいでした。幼い我が子の成長を確認するまでは死ねないとの思いと、自分自身の心は深い底のない沼に沈められたような、重いうつの時間が増えて、明るく振る舞うほど、孤独感でいっぱいでした。
59	感染から 13 年経過して告げられましたが（2000 年）、高額な治療費と副作用が厳しい治療を、諦めなければならないことが悲しかった。週 2～3 回の強ミノの注射は、2 年間続けたが、あまり効果はなく、血小板が減少した。病気に対する焦りと不安が、いつもつきまとい、何かでごまかしていたように思う。
60	肝炎になったことを考えてくよくよしても、仕方のない事ですし、できるだけ病気の事は考えないように、自分の身体をいたわりながら、毎日を過ごしていきたいと思っています。
61	早く治療して治してほしいと思った。

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他
62	大変な病気になってしまったと、悩みに悩んだ。人に感染する病気という事と、5～10 年で肝硬変になると本に書いてあり、恐ろしくなった。3 人の子供をおいて死ぬことはできないと思ったが・・・。フィブリノゲンではないと思っていたし、ましてや、その事さえ知らずにいた。当時は、人に感染する病気イコール死と考えており、怖かったし、大変な病気になったと、どうしようと考えた。
63	出産直後に体調不良で入院。肝炎と診断され、半年近く入院。母乳を与えていたので、子供も肝臓の数値が高く、治療。2 才の長男もいたが、家族バラバラな生活が始まる。病気の不安と同時に、精神的にもすごく落ち込み、周りの人々にも負担をかけ、申し訳なく思った。子供にも淋しい思いをさせ、この頃はとても辛かった。
64	全てが肝炎に振り回されているようだった。保存血 1 パックの輸血で感染したと思っていたので、ただウィルスが消えることだけを考え、ウィルスが消えたら、元の元気な体になると思っていた。小さかった子供達が、私の体調をいつも心配している姿が、余計に辛い気持ちだった。
65	生まれたばかりの娘を残し（2 才の息子も）、2 つの病院に入退院を繰り返しました。職場復帰するまで 2 年かかりました。36 年前で、C 型肝炎という病名もなく、慢性肝炎、非 A 非 B 型肝炎と言われていました。出産の際の輸血が原因だと思い、薬害である認識は全くありませんでした。思い出すのも辛い。思い出したくない何年間です。
66	まさか治らない病気だとは思わなかった。
67	感染していることを知った当時は、家事や子育てに一生懸命で、病気の事を詳しく知ろうとも思わなかったし、死に至る恐ろしい病気であるとは知りませんでした。病気になった本人の気持ちは、他人には分からないと思います。インターフェロンの副作用はとても辛かったけれど、その辛さも健康な人には分からないことです。家族のために、妻、母としてのやるべき事を毎日、時には無理もしたと思いますが、やって来られたかなと思います。
68	肝炎に感染しているのを知ったのは、22 年も前のことで、記憶が多少ゆるくなっていた部分があったが、アンケートを書いていくうちに、いろいろ思い出して、書き直してしまった。出産 1 ヶ月ちょっとで急性肝炎で入院となり、それから 6～7 ヶ月の長期入院！結婚して 10 年目で授かった娘とも 1 ヶ月で離ればなれで、毎日病院のベッドで泣いていたように思う。子供にお乳をあげた記憶もなければ、抱っこしたりおんぶしたりもしていない、悲しい母親であるというトラウマがある。
69	インターフェロンがどのくらい効くのか？この先の肝ガンへの心配、再発への心配。
70	肝硬変、肝ガンにもなったが、見た目がどこが悪いの？という感じです。軽い買い物袋ひとつ持って帰る時、その時は十分持てたつもりが、夜になると足がつり、死にものぐるいで、夜中によく悲鳴をあげているのが辛いです。10 分位でおさまる時はいいのですが、痛み止めや湿布等をしても、4～5 時間つったままの時は、本当に死ぬ思いで辛いです。当時は、お酒も飲めない私が何で肝炎になったのかと、信じられない思いと同時に、幼子 3 人を育てながら、生活のため仕事と育児で忙しすぎて、医師から肝炎のことを聞き、どうしたらいいか死にたい気持ちになりました。体が思うようにいかず、辛かったです。
71	まだ独身だったので子供のいる今とは違い、守るものがない上、仕事上死とは背中合わせだと感じることもあったので、病気になったこと、それにより死ぬかもしれないことなどへの恐れよりも、なぜ肝炎やエイズの恐れのある薬剤が安易に使われたのかということへの怒りの方が強かった。入院中の入院費も、なぜ、病院でうつった病気なのに私が負担するのか、納得がいかなかった。主治医はお見舞いの花を持ってきたが、ピントがはずれていると、腹が立った。主治医の上司は、血液製剤で感染したとは限らないとわざわざ言いに来て、私を怒らせた。24 才の若い娘だからバカにしていると思った。父が医師ではなく、皆知らない人達ならば、訴えたかった。その病院の院長夫人は、「●●●●●●●はきつい仕事だから、辞めるのも潮時でしょう」と言った。すべて忘れられません。父が医師で尊敬してきたので、日本の医療のお粗末さに初めて気付かされ、医療の質とは医療に携わる人、1 人 1 人の人間としての質も問われていると思いました。
72	第 1 子出産後の 1 ヶ月健診採血で、急性肝炎が分かりすぐ入院。1 ヶ月の子を親に頼み半月入院。いちおう数値は下がり（100 台）退院したものの、疲れやすく、十分子供の世話ができなかったことが悔しかった。母乳から子供に感染するかもと言われすぐ中止。母乳で、健康な子供に育てたいという願いは断ち切られる。以後、強制的に母乳を止めたのが原因かどうか分からないが、乳腺症になり、平成 19 年には乳ガンが見つかり手術。抗ガン剤、放射線治療をし、今はホルモン剤服用。その副作用なのか不眠，ホットフラッシュ、気分の落ち込み、関節痛に悩まされる。今は肝炎の数値は一応落ち着いていますが、20 年過ぎた頃から悪くなるとも聞きます。これからどうなるのか、乳ガンを含めとても不安に思い、日々生活しています。
73	手術を受け、その時に使用されたフィブリノゲン。20 年経った今も病気の怖さから逃げられません。定期的に行う腹部エコーウィルス検査。病院と縁が切れません。肝臓ガンというレールの上に乗っています。インターフェロン治療と副作用と高額医療で、決心がつかない現状です。現在の医学で、安心して受けられる治療を望みます。薬害が繰り返されない国づくりと、インターフェロン治療費の助成額、期間について、前向きに進んでいただきたい。
74	当時はウルソの増減、強ミノと、数値が上がらないよう、治療に先生を信じて、時間ができると体を休めるよう心掛けて、運動量も減少させていました。

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ちーその他
75	結婚後、初めて授かった第 1 子流産の際、DIC を起こして、「命と引き替えの輸血です。肝炎発症の可能性はありますが、了承してもらえますね」と主治医に言われ、輸血して一命をとりとめました。その後肝機能が 500～と高い数値に。強ミノの点滴投与を受け続け正常値に。止めると 1,000～まで数値ははね上がり、又点滴・・・を何度も繰り返し、入院は 7 ヶ月に及びました。それまで、風邪など寝たら治る病気しか知らなかった私は、治らない病気を受け入れることができず、投げやりな気持ちになったこともありました。退院後も近くの病院へ通院し、点滴投与を続けましたが、数値は 100 より下がらず、医師に「治らない病気なんだから、この程度」と言われた時が、一番ショックでした。兵庫医大では「いくらでも治療方法がある」と言っていただき、希望を持つことができました。そこで、以前通院していた病院で使われていた点滴が、ミノファーゲンではなく、ノイファーゲンであったため、肝機能がおさえられなかった事を知らされ、通院していた期間が無駄であったと悔やまれました。又、何度も確認したのに、「強ミノと一緒や」と断言し、ノイファーゲンを使用していた医師に対して、怒りさえ覚えました。
76	肝炎に感染したのは 26 年前。お産の（輸血）後 1 ヶ月後に黄疸と全身倦怠感の症状が出たので、産院で検診。GOT、GPT が 2,000 程度あり、劇症肝炎でした。その後 3 ヶ月近く入院。その時は肝炎の恐ろしさを全然理解していませんでした。その後、新聞やテレビ報道で、この病気の恐ろしさを知りました。近くの病院では、そのうちいい薬が出ますよと言う先生の話で、あまりこの病気の事は気にしていませんでした。
77	生まれて 3 年後にはもう C 型肝炎（感染）だったので、普通の体力がどれくらいなのか分からないので、つい頑張ってしまい、後が疲れる。「もとの体を返してほしい」の、もとの体が私にはないので、辛く思うことがあります。ありました。
78	感染を告げられた時は、何故私が・・・？どうして？という気持ちで信じられませんでした。昨年の 1 月までは、自分は輸血による感染だと思い込んでいましたが、血液製剤による訴訟ならば、もしかして私もそうかと思い、駄目でもともとで手術した病院に行き、カルテが残っていたのでびっくりしました。
79	まだ働けていることに、感謝しています。病気のために、仕事をなくしたらどうしようと考えたことは多々ありますが、働かせていただけて感謝しています。埼玉にいたことがありますが、歯科の先生に治療を断られた時は、悲しかったです。
80	私がインターフェロンを始めた頃は、3 人に 1 人の割合でしか効果がないと言われました。でも、先生の「絶対に治る薬ができる」という言葉に、全く不安はありませんでした。1 本目のインターフェロン後、あまりの苦しさに逃げ帰りたい気持ちでしたが、絶対に治るという言葉を信じて、乗り切ることができました。医者は技術だけではないと痛感しました。私は、その先生と出会えたことによって、勇気をもって病気と付き合うことができました。
81	残念で悔しい。命の短さに辛い思いである。毎日毎日どきどきして生きていくことの苦痛。国に人生をもぎ取られたと思った。子供に移植を願い出ましたが断られ、妹（本人）も苦しんでいた。子供との移植問題。互いに苦しむと思う。もう少し国の力がほしいと思います。死を待つだけです。医師からも話があり、子供も自分が原因であることを知っている。
82	最初に肝炎であると知った時は、子供を死産し、その上二度と子供の産めない体になり、そのことの方が私にとってはショックで、肝炎に感染していることなど、どうでもいい気持ちでした。
83	告知後、長い年月も経過し、もはや後期高齢者の仲間入りです。この上は、いずれの病にしろ、最後まで自力で歩けることを目標に、日々健康を心掛けた暮らしをしていきます。
84	病気のことでの相談相手は、感染してから 1 人もいない。自分の人生を、もとの体を返してほしい。
85	当時は、非 A 非 B という何だか分からない病気だということで、不安でしょうがなかった。何をどう治療すればいいのか、どんな事に気を付ければいいのか。ただ、高カロリー、安静、点滴と言われ、本当にこんな事で治るのか分からなかった。
86	子供達、主人に C 型肝炎が感染していないか、とても心配であった。
87	もう 24 年も前のことですが、当時はまだ若く結婚したばかりで、夫の給料も少なかったので、入院費や普通に通院しても、検査代もバカになりませんでした。インターフェロンも当時は保険が利かなかったので、1 回 3 万円×週 3 回×月 4 回×6 ヶ月のお金はなく、あきらめていました。保険が利くようになったと友人から聞き、平成 13 年に治療しました。医療費の自己負担の軽減や、所得によってですが、自己負担なしにしてほしいです。
88	これまで人に迷惑かけることなく、真面目に生きてきたのに、どうしてという思いでした。それと同時に、家族の誰でもなく、まだ自分でよかったと自分を納得させる思いでした。経済的不安もあり、すぐにインターフェロン治療など、考えることもできなかった。
89	当時は死の恐怖（劇症肝炎）もありました。子供も小さく、母として妻として嫁として、何にも役に立てない自分を責めて、イライラする毎日でした。けれど、夫の優しさや子供の笑顔、周りの協力のお陰で、徐々に元気になりました。当時は、検査数値にも一喜一憂して、先の見えない治療に苛立ちもありました。誠意ある医師に出会うと、涙していました。
90	当初は自分自身が若かったし、子育て真っ最中だったので、病気の数字のことよりも、必死で生きていたことだけを思う。

No.	問 3-10-1　肝炎に感染していることを知った当時の気持ち－その他
91	これまで 18 年間、とても疲れやすく、いつも体がだるく、家事も思うようにできず、自分で怠け者だと思い込んでいたのは、そうではなく肝炎に感染していたせいだと思った。よく夫婦喧嘩もした。時間を返してほしい。
92	感染を知った時、肝炎から肝がんになると言われ、あと何年生きられるんだろうかと絶望したが、他の病院で天寿をまっとうされている方もおられますし、悪くなるまでに、まだ C 型肝炎が分かってから日が浅いので、良い薬ができるかもしれませんからねと言っていただき、心が楽になりました。
93	C 型肝炎になる前は、人との付き合いも億劫ではなかったが、インターフェロンを打ち治療し、なぜかそれから体力が落ち、元気に生活している方が羨ましかったです。お産の時に大量出血し、生命が助かっただけでもいいと思わなければと、当時は思い、頑張ってインターフェロン治療を続けました。毎回高熱が出てとてもつらかったけれど、当時の会社と家族に支えられて、頑張れました。専業主婦だったら、治療できませんでした（高額）。
94	インターネットや本で病気の事を調べたりすると、つらい気持ちになった。自分には、「きたない血」が流れていると思って、落ち込むこともあった。1 人目の出産の時の感染なので、2 人目の子供に感染していたらという不安があった。
95	ここ数年肝炎の治療をしていないので、はっきりしたことは分かりませんが、気持ちはゆらいでいる。
96	心臓病と肝臓のダブルパンチで、本当に希望を失いました。妻との離婚もありました。自分が心臓病になったのが原因ですが、仕事も十分にできず、疲れるのです。そして体が痒い。医者からも十分注意するよう言われ、ビクビクハラハラの状態でした。現在も不安です。肝炎になった時、風呂の制限があり苦痛でした。肝臓で約 1 年程、心臓手術した病院に入院しました。入院中、展望が全くなくて、七転八倒でありました。医者から感染を伝えられた時は、本当に絶望的でした。心臓を助けられて、こんな事を言うのも申し訳ないのですが・・・。
97	当時、子供は中学生と高校生でした。ただ、子供のために何としても生きなければと思いました。
98	今は家族（特に主人）に守られて、頑張っています。感謝しています。
99	肝炎がある自分とない自分を比べることはできないので、現在の自分を丸ごと受け入れて、生きていこうと思っています。疲れたら休む。ただジーッとして休養することで少し元気がでてきたら、動き出すようにしています。自分の気持ちを上げることを大切にして、モチベーションを下げるようなことは、考えないようにしている。
100	いくら完全に治ったとしても、身体の中にウィルスが 100%いなくなるとは信じられません。現に今、医師はありませんと言われますが、数値が発症前より高いので不安です。
101	体調に変わりはなかったが、検査値は高値を示していて、自分の知らないところで病気がどんどん進んでいき、死んでしまうんだと思った。毎日、「自分があと数ヶ月の命しかない」という夢を見た。
102	今は心配してくれる主人がいて心強いが、1 人になったら心細い。又、主人も体の不調がよくでるので、とても心配。
103	第 1 子を出産したばかりで、どうやって生きていって良いか、強く不安に思った。でも、やらなきゃいけないことがいっぱいで、その気持ちが強かった。
104	主治医から、放っておけば慢性肝炎、肝硬変、肝臓ガンと進行していく病気だと言われ、怖かった。
105	私は白血病で亡くなった娘のドナーになるため、検査を受けました。検査の結果、医師から、「お母さんは C 型肝炎に感染しているので、ドナーにはなれません」。とてもショックでした。その時は、自分の体より娘を助けてあげられない悔しさでいっぱいでした。つらい治療にも弱音をはかず、一生懸命生きようとした娘は、H19 年 1 月 3 日 21 才で亡くなりました。悔しい。とても悔しいです。許せない。
106	生後すぐの子供を抱いて、毎日点滴に病院に通い、その時肝臓がすごく腫れていて、血液検査でもすごく上昇していて、よく歩いて帰れたと思った。どうして肝炎なのか、子供は何とか健康に育てる事を一番に考え、自分の事は後回しになった。出産後に体調を崩したのかと考えたが、やはり、出産時にした点滴が頭にあった。病院へ何回か問い合わせた。苦痛を分かってもらえず、辛い日々を送った。1 ヶ月検診の時、出産時の病院へ行った時に黄疸が出ていて、小児科の先生がびっくりして、産科の先生に相談に走って行った。ますます病院に不信感を抱いた。生活費、医療費と生活がきつい。
107	このまま病気が進行するのを待ちながら生活するのか？子育てはできるのか？不安でたまりませんでした。
108	とにかくショックだった。手術の 1 ヶ月後に肝炎を発症した。約 3 年間寝たり起きたりの生活だった。家族も大変だった。私も辛かった。
109	医師に、長生きしたかったら働きに出ずに、なるべくグータラしていなさいと言われたので、子供達が小さかったので、無理をせず体調を気遣いながら、子供達が大きくなるのを見ようと思った。
110	色々な病歴があるので、質問にあてはまらないものがあります。1 人の子供も失って、自分も肝炎になってしまって、何が言えますか。この質問は、原告にとって失礼です。
111	当時、入院は 2 ヶ月位と言われたが、4 ヶ月過ぎても退院できず、生きて病院から出ることができるのかと不安だった。
112	出産時、胎盤剥離で、残念ながら子供は死産して、母親（私）も相当危険な状態だったと、聞かされておりました。その当時、肝炎の怖さは自分なりに知っていたつもりでしたが、ひきかえに命をいただいた事に対して、犠牲あっても命だったのかなと、仕方なく自分なりに納得しておりました。